台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 159-186
2009-10-31 收稿，2010-01-10 通過刊登

朱舜水對加賀藩的儒教思想普及

徐興慶*

摘要

本文旨在考察德川初期朱舜水（1600-1682）於加賀藩名君、第五代藩主前田綱紀（1643-1724）以及同爲加賀藩學者之木下順庵（1621-1698）、奧村庸禮（1627-1687）、五十川剛伯（？-1699）等人推展儒教發展的過程中所作的貢獻，並檢討其與加賀藩「誠、敬、禮、學、行」等儒教體制形成之關係。

前田綱紀的母親大姬（清泰院，1627-1656）是水戶藩首代藩主德川賴房（1603-1661）的女兒，基於這層關係，加賀藩的儒教發展深受水戶藩的影響。前田綱紀頻頻派遣奧村庸禮、五十川剛伯等學者至水戶藩受教於朱舜水，並與朱舜水有書信的往來。朱舜水去世後，前田綱紀隨即命五十川剛伯完成日本最初之朱舜水全集『明朱徵君集』（十卷，通稱加賀本）的編纂。至今加賀藩（現石川縣立美術館）及關西大學圖書館的貴重書庫，仍保存著許多前田綱紀與朱舜水相關之漢籍文獻史料。

朱舜水主張「君是天子，忠於天子」，認爲忠孝節義是皇統史觀的基本核心，而長年致力於「大義名分」的思想普及。前田綱紀曾聘請御用繪師狩野探幽（1602-1674）爲南北朝時代的武將楠木正成（1294-1336）父子繪製「櫻井驛訣別圖」，並透過木下順庵敦請朱舜水撰寫「楠公父子決別圖贊」。爾後，這成爲德川光圀（1628-1701）編纂『大日本史』的重要精神所在，而楠木正成亦成爲水戶學者崇敬

* 台灣大學日本語文學系教授

的尊皇家。因此，本文之另一焦點，即在於探討朱舜水命名取字的思想主張所帶給加賀藩儒家政治思想的影響。

關鍵字：加賀藩、儒教思想、朱舜水、前田綱紀、木下順庵

The Popularization of Zhu Shun-Shui's Confucianism Thinking on Kaga-han

Shyu, Shing-ching*

Abstract

This study intends to investigate the contributions made by Zhu Shun-Shui (1600-1682) in the early Edo *Period during the process of the development of* Confucianism promoted by the famous Kaga-han monarch Maeda Tunanori (1643-1724) who was the fifth *Han*-Su, as well as Kinoshita Jyunan (1621-1698) , Okumura Yasunori (1627-1687) , and Isogawa Kouhaku (?-1699) et al who were Kaga-han scholars, and to explore their relation with the formation of the Confucianism system "Honesty, Respect, Courtesy, Learning, and Practice" in Kaga-han.

Maeda Tunanori's mother, the imperial concubine (Seitaiin, 1627-1656) , was the daughter of Tokugawa Yorifusa who was the first *Han*-Su of Mito-han (1603-1661). Based on such relationship, the development of Confucianism in Kaga-han was deeply influenced by Mito-han. Maeda Tunanori frequently dispatched the scholars such as Okumura Yasunori, Isogawa Kouhaku, etc. to Mito-han to receive Zhu Shun-Shui's teaching, and he also corresponded with Zhu Shun-Shui. After Zhu Shun-Shui passed away, Maeda Tunanori immediately ordered Isogawa Kouhaku to complete the first compilation of Zhu Shun-Shui Quan Ji "Collection of Ming Zhu Zheng Jun" in Japan (Ten scrolls, commonly called "Kaga Version"). Up to now, many *Chinese* classics as well as literatures and historical resources related to Maeda Tunanori and

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

Zhu Shun-Shui are still preserved in the precious stacks in Kaga-han (now *Ishikawa* Prefectural Museum of Art) and Kansai *University* Library.

Zhu Shun-Shui maintained that “The monarch is the Son of Heaven, and we should be loyal to the Son of Heaven”. He thought that “loyalty, piety, integrity, and righteousness” comprise the basic core of the imperial line’s *historical* scholarship, and he endeavored to popularize the thinking of “Righteous Cause” all the year round. Maeda Tunanori had once engaged his personal painter Tanyu Kano(1602-1674) for painting the “Picture of Parting at Sakurai Station” for the martial general Kasunoki Masashige (1294-1336) and his child in the Southern and Northern *Dynasty*. Also, through Kinoshita Jyunan, he earnestly invited Zhu Shun-Shui to write the “Comment for the Picture of General Kasunoki and his Child at Parting” that became the important essence of “the *History* of Great Japan” compiled by Tokugawa Mitsukuni later. Hence, Kasunoki Masashige also became the sonno practitioner adored by Mito scholars. Therefore, another focus in this article lies in exploring the influence on the Kaga-han Confucianism’s political thinking caused by Zhu Shun-Shui’s maintenance of the thinking of denomination and title selection.

Keywords: Kaga-han, Confucianism Thinking, Zhu Shun-Shui, Maeda Tunanori, Kinoshita Jyunan

加賀藩における朱舜水の思想の普及

徐興慶*

要旨

本稿は徳川初期加賀藩の五代藩主、名君の前田綱紀（1643-1724）及び、同じく加賀藩の学者である木下順庵（1621-1698）、奥村庸禮（1627-1687）、五十川剛伯（？-1699）らが推進した儒教の発展過程における朱舜水の役割、並びに朱舜水が加賀藩にて「誠、敬、礼、学、行」などの儒教体制を形成した実態を明らかにし、さらに、朱舜水の「名」「字」選定の思想主張と加賀藩の儒教思想の関連性を論じたものである。

キーワード：加賀藩、儒教思想、朱舜水、前田綱紀、木下順庵

* 台湾大学日本語文学科教授

加賀藩における朱舜水の思想の普及

徐興慶

序言

本稿は徳川初期加賀藩の五代藩主、名君の前田綱紀（1643-1724）及び、同じく加賀藩の学者である木下順庵（1621-1698）、奥村庸禮（1627-1687）、五十川剛伯（？-1699）らが推進した儒教の発展過程における朱舜水の役割、並びに朱舜水が加賀藩にて「誠、敬、礼、学、行」などの儒教体制を形成したことについて論じたものである。

前田綱紀の母親大姫（清泰院、1627-1656）が水戸藩初代藩主徳川頼房（1603-1661）の娘であることから、加賀藩の儒教発展は、水戸藩の影響を深く受けている。前田綱紀はしきりに奥村庸禮や、五十川剛伯などの学者を水戸藩に送り、朱舜水の門下に入らせた。また、朱舜水とも直接手紙のやりとりを行なった。朱舜水が亡くなった後、前田綱紀は五十川剛伯に命じ、日本でいち早く朱舜水全集『明朱徵君集』（十巻・通称加賀本）を完成させた。加賀藩（現在の石川県立美術館）及び関西大学図書館の貴重書庫には前田綱紀と朱舜水に関する漢籍文献や史料が数多く保存されてきた。

朱舜水は常に「君是天子、忠於天子」と言っており、忠孝節義が皇統史観の基本的核心を為し、「大義名分」という思想を普及させた。前田綱紀は御用絵師の狩野探幽（1602-1674）を招き、南北朝時代の武将、楠木正成（1294-1336）父子の今生の別れである「桜井駅訣別の図」を描かせた。前田綱紀の意に従い、木下順庵は朱舜水に「楠公父子決別図賛」を書くよう依頼した。その後、楠木正成は水戸学者が崇拝する尊皇家となり、徳川光圀が編纂した『大日本史』の精神的柱となった。よって、本稿のもう一つの焦点は、朱舜水の「名」「字」選定の思想主張と加賀藩の儒教思想の関連性を探求していく。

一、加賀藩における儒教思想

加賀藩祖前田利家（1539-1599）の長男として生まれ、二代藩主となった前田利長（1562-1614）は、安土桃山時代から徳川初期にかけての武将でありながら、慶長年間（1596～1614）に儒教の普及に力を注ぐため、明の儒者王伯子（國鼎、生卒年不明）を招聘した。当時日本で刊行されていた儒学の教科書である四書に誤りが多かったので、その校正に務めてもらった。このことについて、王伯子はその校刊本の跋に次のように記述している。

> 日本重刊先聖四書、間多錯漏、而文句向背稍違聖語。余入加賀、加賀國王筑前守様、命鼎照日本刻論語抄寫。余幼習聖經、尚記章句、知有錯悞、遂補其損、裁其益。間有一二字近通者、存諸、蓋因其音語讀法顛倒之不同也。抄成二十章、字拙不工。聖經永寶。王國鼎書。[1]

王伯子が渡日したのは、日本が百年余り続いた戦乱の戦国時代を終えて間もない頃だったので、尾張藩の陳元贇や水戸藩の朱舜水よりも早かった。つまり、前田利長が王伯子を招聘したことは、日本が漢学教育を重視する先駆けとなったことが言えよう。

一方､三歳から八十年近く加賀五代藩主の座にあった前田綱紀は、叔父の水戸藩主徳川光圀（1628-1700）と同じく朱舜水の門人であり、また、ともに漢学教育を広げた名君でもある。「經世濟民の業に勵精し、朝儀を興し、律令を定め、併せて文教を嗜好し、社稷の計を為すの暇、墳典を渉獵して、その奥頤を剔抉し、藻を擒り翰を馳せ、之に加ふるに該博を好みて、天下の奇書を貯へ、その書齋は、之を宋の崇文院に倣ひて、經史子集に分類し、收藏と點檢とに便ならしめたり」[2]というように、綱紀は書物の編纂・収集そして学問を奨励することに積極的に取り組んでいた。藩の教化政策を根底から支えるため、奥村庸禮・徳輝親子、五十川剛伯、古市務本、服部其衷な

---

1 『石川県史』第三篇（金沢：石川県、1938）、頁 220。近藤磐雄編：『加賀松雲公』上巻（東京：羽野知顯、1909、日本国立国会図書館蔵版）、頁 26。
2 『石川県史』第三篇（金沢：石川県、1938）、頁 294。

どの藩臣を江戸に派遣し、朱舜水に就いて学んでもらった。後、これらの藩臣は加賀藩の漢学教育を普及する中心人物となった。

表一　徳川初期加賀藩に招聘した儒者一覧表

招聘責任者	招聘対象	専門分野	招聘時期
前田利長	王伯子	経学（四書）、漢詩	不明
前田綱紀	松永永三	朱子学	萬治 3 年（1660）
前田綱紀	木下順庵	朱子学、古学	萬治 3 年（1660）
前田綱紀	平岩仙桂	漢詩、紀行詩、草隷	不明
前田綱紀	澤田宗堅	漢詩	寛文 6 年（1666）
前田綱紀	中泉恭祐	漢詩	寛文 6 年（1666）
前田綱紀	高泉性激	黄檗禅学	延寶 3 年（1675）
前田綱紀	木下順信	漢詩	延寶 6 年（1678）
前田綱紀	羽黒成實	漢詩	天和元年（1681）
前田綱紀	室鳩巣	朱子学	寛文 12 年（1672）
前田綱紀	兒島景范	漢詩	正徳 4 年（1714）

（筆者作成）

表二　加賀藩から江戸に派遣し朱舜水の門人となった儒者一覧表

派遣者	儒者	専門分野	派遣時期
前田綱紀	奥村庸禮	禅学、儒学、漢詩	不明
前田綱紀	五十川剛伯	朱子学、古学	寛文 8 年（1668）
前田綱紀	古市務本	朱子学、古学	不明
前田綱紀	服部其衷	朱子学、古学	不明

（筆者作成）

前田綱紀が藩政を推進していくプロセスの中で、忠孝の大義をかなり重視した。寛文五年（1665）朱舜水が江戸に着いて講学を始め

ると、その学徳の高さを耳にした綱紀は次から次へと五十川剛伯、奥村庸禮、古市務本、服部其衷などの藩臣を受業に赴かせた。

1898 年から 1906 年にかけて台湾総督府民政長官を務めた後藤新平（1857-1929）が、1912 年に稲葉君山本『朱舜水全集』の序文に、朱舜水について「縦明室恢復之志不成，而以滿身忠憤之氣，寓之一篇楠公之題賛」[3]と評価を与えたように、朱舜水が後世の日本人に特に称えられたのは、楠木正成のために賛を書き、その碑文に翻刻されたことである。そして、この事がきっかけで前田綱紀と朱舜水の交流は深められたのである。

南北朝の武将である楠木正成（1294-1336）は、家族の存亡を度外に置いて後醍醐天皇（1288-1339）のために挙兵し、室町幕府初代将軍足利尊氏（1305-1358）の軍隊と対抗したが、湊川の戦いで敗れて自害し、北朝の足利幕府に悪党朝敵であると位置づけられた。この尊皇志士を本末顛倒する史実は、徳川光圀が『大日本史』を編纂することになってはじめて南朝を正統の王朝に改めた。これが水戸藩修史事業の三大主張の一つでもある。

室町幕府の初代将軍足利尊氏（1305-1358）が後醍醐天皇（1288-1339）の抜擢を受け、その御名より字を賜ったなどの礼遇を受けていたにもかかわらず、反旗を翻して光明天皇（1321-1380）を新たに擁立して自ら征夷大将軍となった。天皇に叛いた人は足利尊氏であって楠木正成ではないと考えた朱舜水は、光圀の「南朝正統説」に賛成し、楠木正成を逆賊から忠臣に名を正したのである。楠木父子の忠孝義行を表彰するため、前田綱紀は寛文十（1670）年四月に、当時「狩野派」の代表的な絵師狩野探幽に「桜井駅訣別の図」を描かせ、同年の十一月に木下順庵を通して朱舜水にその賛を書かせた。後に、徳川光圀が楠木正成殉死の地湊川（現・兵庫県神戸市中央区）に「嗚呼忠臣楠子之墓」の石碑を建て、乱世をおさめ正にかえす（撥乱反正）意味合いで、朱舜水の「楠公父子決別図賛」を碑陰に刻んで後世に偲んでもらおうとした。これに対して、朱舜水は

[3] 後藤新平：「朱舜水全集序」、稲葉岩吉編：『朱舜水全集』、頁 2。

「楠公碑陰記」を書いて呼応し、その内容を節録して見てみると、

> 忠孝著乎天下，日月麗乎天。天地無日月，則晦蒙否塞；人心廢忠孝，則亂賊相尋，乾坤反覆。余聞楠公諱正成者，忠勇節烈，國士無雙，蒐其行事，不可概見。……自古未有元帥妬前，庸臣專斷，而大将能立功於外者。卒之以身許國，之死靡佗。觀其臨終訓子，從容就義，託孤寄命，言不及私。自非精忠貫日，能如是整而暇乎？[4]

と、楠木正成の「義」を際立たせ、そして、明を滅ぼした清の栄禄を受けない決心など朱舜水自身が固持する大義名分を宣揚した。碑文を通して、朱舜水は日本人に楠木正成の忠義行為を正視するよう、また「忠」に対する思想教育やその行為の体現を重視するよう呼びかけた。武士階層によって天皇や将軍の政権基盤を固めてもらうという大義名分にこだわった朱舜水の主張は、徳川幕府の需要や日本国体の維持にぴったり適合していた。

後に、長州藩の幕末志士で、思想家として名高い吉田松陰（1830-1859）が、三度も湊川に赴いて楠木正成の墓を参拝したが、そのつど朱舜水の書いた碑文を読んで涙ながらに楠木正成の忠誠心を称えたそうだ。これは、朱舜水が強調した忠義の思想が闇斎学派をはじめ、日本の文人や武士に深い影響を与えた証の一つであると言えよう。

国が滅ぼされるのを見て、日本に身を委ねる道を選んで一死以てその志を明かさなかったものの、日本に「乞師」の意志を強く伝えたことは「義」の表現であり、生涯明朝の衣装を身に纏ったことは「忠」の表しであると、楠木正成の忠義を称賛することによって、朱舜水は自分自身が明朝の離叛者ではないことを最も適切な解釈というか弁駁を行ったのである。

明治維新後、皇室を守った楠木正成の忠君愛国の義行を表彰するため、明治天皇は湊川の墓跡で楠木一族を祀る湊川神社を建立した。

---

[4] 朱舜水：「楠正成像賛」、朱謙之編：『朱舜水集』（北京：中華書局、1981 年）下冊、頁 571-572。

二、前田綱紀と朱舜水

（一）前田綱紀の「名」と朱舜水

朱舜水の文集の中で、日本官学界の人のために名や字を選定する記録が随所見られる。加賀藩だけに焦点を絞っても、前田綱紀の「加賀中将菅原綱利字取益説」、五十川剛伯の「五十川剛伯字濟之説」、奥村徳輝の「奥村浚明名徳輝説」、加賀守鍋島直能（1623-1689）の「伯養説」、古市務本の「清源季敬名務本説」などが挙げられる。その名や字を選定した経緯あるいは理由についての記述から、朱舜水が儒家の政治思想に関する主張が見えてくる。

前田綱紀の改名について、木下英明氏が「加賀と朱舜水」[5]と題とした論文の中で詳しく論述している。氏が藤岡作太郎『松雲公小傳』の中からその名前についての説明を下記のように引用した。

> 松雲公氏は前田、本姓は菅原、幼名を犬千代丸といひ、元服して綱利と名のり、中年に更めて綱紀といふ。國義、取益、振肅、中和、敍倫は皆その字にして、顧軒、梅墩、香雪、松雲軒等はその號なり。[6]

その内、「綱紀」という名、「取益」・「振肅」という字は朱舜水と関係している。また、『徳川實紀』承應三（1654）年正月十二日の記事によると、

> 十二日松平犬千代首服加へられ。御名の一字給はり。正四位下少將に敘任し。加賀守綱利（後綱紀改）と稱す。[7]

とあって、満十二歳で元服の儀を迎えた前田綱紀が、四代将軍徳川家綱（1641-1680）から「綱」の字が賜られ、幕府の儒官林羅山（1583-1657）によってその藩祖以来襲用する偏名の「利」の字を選定して「綱利」と改名することになった。延寶五年（1677）に「綱利」の名に意に満たない前田は、大学頭林鳳岡（春常、信篤，

---

[5] 木下英明：「加賀と朱舜水」、『茨城県立歴史館報』26、頁 1-26。
[6] 木下英明論文、頁 7 参照。藤岡作太郎：『松雲公小傳』（東京：高木亥三郎、1909、日本国立国会図書館蔵版・近代デジタルライブラリー）、頁 13 引用。
[7] 『徳川實紀・嚴有院御殿實紀』巻七、黒板勝美編：『新訂増補国史大系 41』（東京：吉川弘文館、1998-1999）、承應三（1654）年正月十二日記事。

1644-1732）に頼んで、『國語』『漢書』『南齋書』『文選』『家語』などの文献から典故や事例に基づいて「綱裨」「綱輔」を筆頭とする十七種の名前を候補に挙げてもらった。[8]絞りに絞って林鳳岡は諸候補の中から「綱紀」「綱倫」を選出し、最後に朱舜水の判断によって名を「綱紀」と選定した。[9]

（二）前田綱紀の「字」と朱舜水

前述の「綱紀」の改名は林鳳岡及び朱舜水の意見が採用されたほか、「字」の選定に関しても朱舜水の参与があった。朱舜水が「取益」という字を薦めた理由を「加賀中将菅原綱利字取益説」によって下記のように説明している。

> 為人君者，上而天子以至於公、侯、伯、子、男，無非取諸人以為國者。廟朝宮闕，犧牲粢盛，無竢言矣。即臺榭觀遊，皆取諸人以為材。錦衣玉食，皆取諸人以為養。至若取諸人以為善，則寥寥焉未有幾人！何也？是故取民之財，用民之力，逾其制焉，遂貽錙銖泥沙之誚。至於善，所謂取之無禁，用之不竭者也，何莫之取焉！[10]

世の上位者がよく国のため、社稷のためと言って、民の財を取ったり民の力を用いたりするが、尽きることのない「善」をあまり取らない、と問題提起をした。一方、

> 昔者舜自耕稼陶漁以至為帝，無非取諸人以為善，與人為善者，故曰：「大舜有大焉」。然而善取者取之天，善益者益夫天下萬世。即耒耜之利，以教天下，本取諸益。使天下獲耕稼之利，以養萬民，則天施地生，其益無方矣。無方之利，誠天下萬物之綱也已。由是而五教，曰：「術、匡、直、振、徳」皆所以紀焉者也。[11]

君主になるまでに舜は、歴山で耕作し、雷沢で漁業を営み、河浜で瓦器を焼き、寿丘で什器を作り、負夏で商売を行って利益を納めた。

---

[8] 木下英明論文、頁 7 参照。『加賀松雲公』上巻、林鳳岡「松雲公林家贈答書翰抜書」、頁 315-319。
[9] 侯爵前田家所蔵文書「朱舜水撰松雲公名字の説」、『加賀松雲公』下巻、頁 177-179。
[10] 朱舜水：「加賀中將菅原綱利字取益説」、『加賀松雲公』下巻、頁 176-177。『朱舜水集』下冊、頁 441-442 にも収録されている。
[11] 同上注。

上手にものを取る者は天より益を取って天下万世に益を与える。つまり、耕作方法を民に教えることによって自然の恵みを獲得し、それを以て民を養う。天地からの授かり物は無限であり、その利益も延々たるものであると説明した。さらに、

> 今天下人君之所為，取諸其民者皆損也，非益也。取人之財，益在帑藏。取人之善，以為益在一身一國。若夫取天之道，地之利，則益在萬世，民惟恐其取之不多也。字之曰「取益」，亦以道之至大者廣之爾。[12]

と、民から取る行為は損であって決して益ではないので、前田綱紀に世間一般の君主と違って、天の道・地の利を取って万世に益を与えるよう期待を込めて「取益」の字を勧めた。ここでも政治家に経世致用の学を宣揚する姿勢をはっきりと見せている。

字の選定について、朱舜水は他にも「允釐」「振粛」「咸熙」の三種を説明付きで提出した。のち、前田綱紀が字説を書いてもらおうと思ったが、朱舜水が死去したため、実現できなかった。結局は林鳳岡、木下順庵に委ねて「振粛」をもう一つの字として決めてもらった。図録『前田綱紀展』に「松雲公字振粛説」の一文が収録されている。『加賀松雲公』下巻にも下記の内容が示されている、

> 是書初め六行は舜水の自筆なりと雖も、書法艱澁、其壯時の作に似ず、意ふに老病の為め運筆意の如くならざりしならん。第七行以下は五十川剛伯の書蹟に似たり、蓋し舜水命じて代書せしめしものなるべし。[13]

文末には「嘉平二十有四日儗上 明舜水朱之瑜頓首拝」と記されている。「嘉平」為陰暦の十二月で、朱舜水が病死したのは天和二（1682）年四月十七日であることから、この文書はその遺作になる。[14]これからは朱舜水が「允釐」「振粛」「咸熙」と提案したときの論拠について考えてみよう。まず、「允釐」に関しては、

> 一曰「允釐」。允者，信也、孚也、誠也。釐者，理也、治也。……

[12] 同上注。
[13] 『加賀松雲公』下巻、頁 179。
[14] 木下英明論文、頁 10。『加賀松雲公』下巻、頁 179。

人君舉事一一推見其隱,『傳』曰:「開誠心,布公道」、宋太祖曰:「洞開重門,直如我心」,信也,始終如一,表裏如一之謂。孚者,君信其民,民信其君,上下相孚契也。為政有巧借文言,塗飾其外,以欺天下者,今乃至誠懇惻,事事以實心行之,則百官自然釐飭,萬事自然整齊,所謂允釐也。

此是規模已定,治功将成之時,三者自有先後。[15]

朱舜水が愛読する『資治通鑑・唐紀』に「夫人主患不推誠,人臣患不竭忠。苟上疑其下,下欺其上,将以求理,不亦難乎」とあるように、君の誠及び臣の忠を強調している。これに等しく、君主が誠信・表裏一体を以て政事をつかさどれば、百官は自ずからその職務を尽くし、万事は自然と整理整頓できると、「允釐」の字号にはこういう意味が含まれている。

二曰「振肅」。振者,舉而興之之謂。肅者,踈密得所,細大咸宜也。國之大事,有積久而頽弛者。有志之君,奮然欲為挈定,然不知於何經始,事事皆欲精明,小大必經思慮,及其所為既倦,情隨事遷,萬事盡復其故。所謂叢脞所為,強弩之末,不能穿魯縞者也。殊不知振其綱、肅其紀,則萬事自理矣。不然,衡石程書,何益於治哉?振綱肅紀,是經始工夫。[16]

「振肅」とは、政綱を振興し、紀律を整粛するという簡単明瞭ながら重要な意義を持っているし、「綱紀」の名と絶妙に呼応している。これは後に「振肅」が採用されたゆえんでもあろう。

三曰「咸熙」。熙者,明也、廣也。庶績其凝之後,則利弊昭昭,弘益遠大,子孫保之,臣民奉之。『詩』云:「不愆不忘,率由舊章」,惟其明也。百姓平章,黎民於變,友邦冢君各思自奮。子輿氏曰:「有王者起,必來取法,是為王者師也」。然則治平之效,不既明著而溥博哉!此是之綱之紀,治化既成之效。[17]

咸はことごとく、熙は光が広く行きわたることを意味している。政務が推進されていくうちに、その利益や弊害がはっきりと見えてく

[15] 『加賀松雲公』下巻、頁 178。
[16] 同上注。
[17] 『加賀松雲公』下巻、頁 178-179。

る。万民は百官が各自にその職務を尽くし、王道仁政が行われるのを見ると、自然に付いて来て安らかに暮らす。「咸熙」という字には、前田綱紀が仁政を行う王者になるようにと願いが込められている。

朱舜水はこうして儒家の「誠信治世」「振綱肅紀」「王政を以て治理教化」などの政治思想を字の選定に際して明確に伝えたのである。

三、木下順庵と朱舜水

木下順庵（1621-1698）、名は貞幹、号は順庵のほかに錦里・敏慎齋があり、京都の出身である。朱子学者松永尺五に師事し、万治三年（1660）四十歳のときに、前田綱紀に仕え、加賀藩の儒臣となった。天文・暦学・礼楽・爾雅・訓詁など幅広い分野に通じる木下順庵は、和漢古典の収集保存及び編纂に力を尽くした。そして、前田綱紀が藩政改革を推進し、儒教文化や教育を振興するプロセスのなかでも、大きな役割を果たした。

木下順庵が前田綱紀の招聘を受ける前に、先師松永尺五の息子永三（思齋、1628-1710）が困窮不遇の生活に陥っていることを知り、儒臣になるチャンスを永三に譲ると表明して俸禄を辞退した。このことについて、原念齋が『先哲叢談』の中で「古人の節有り」と順庵が情誼を重んじ、推譲行為で儒教の「仁」や「譲」などの倫理道徳を体現したことを讃えた。一方、前田綱紀もまた人材を愛し、その真価を見抜いて使いこなせる名伯楽で、順庵と永三を同時に藩臣として起用することにした。[18]前田綱紀は従来加賀藩の学術の普及に力を入れている。万治二年（1659）から書物奉行をおき、書物調奉行を各地に派遣して書物を集めさせた。朝廷・幕府・公卿・大名・社寺・蔵書家から和・漢を問わず中国・朝鮮から蘭書を含めた刊本・写本・絵巻物・古書翰などを購入したり書写させたりした。網羅し

[18] 竹内弘行、上野日出刀：『木下順庵 雨森芳洲』（『日本思想家 7』、東京：明徳出版社、1991）、頁 62 参照。原念齋、東條琴臺：『先哲叢談』（東京：東學堂、1892、日本国立国会図書館蔵版）、上冊、頁 51-52。「加賀侯厚幣召之、辭曰：先師松永先生之子某、嗣承家學、未就仕途、家道屢空、請用彼以使得其宿望。侯聞之曰：今之世交同手足之親、誼比金石之固、於利害所關、則崖岸相向者比比皆然。如順菴可謂有古人節矣。即與松永氏子俱禮聘之。」

た書物の量・質ともに充実であることから、木下順庵の弟子新井白石（1657-1725）に加賀藩は「天下の書府なり」と高く評価された。[19]

儒教を中心とした学問を振興するために招かれ、典籍収集の担い手として活躍した木下順庵は、朱舜水が江戸で講学を始めることをきっかけに、手紙のやり取りをするようになった。二人の年の差は二十一歳で、この忘年の交わりは朱舜水が亡くなるまで続いた。木下順庵の詩文集『錦里文集』[20]（第十七巻、書啓、「内閣文庫」蔵）には朱舜水宛の書簡が十六通残されている。これに対して、朱謙之編纂の『朱舜水集』には「與木下貞幹書」八通、「答木下貞幹書」六通、「謝木下貞幹啓」、「答木下貞幹問」などの書簡が収められている。これらの書簡は二人の交遊関係や学問主張を読み解く重要な手掛かりになる。

後に徳川幕府の儒官に登用され、五代将軍徳川綱吉（1680-1709）の侍講をつとめ、日本史の編纂に尽力し、儒学の実践を重んじる木下順庵は、詩賦文章に長じる優秀な門人を数多く育成し、「一代の通儒」とか「江戸詩文の開拓者」と称されるほどであった。門人の中で名高い人物を挙げてみると、新井白石が将軍徳川家宣・家継の補佐役として幕政に参画し、室鳩巣（1658-1734）が将軍徳川吉宗の侍講をつとめた。それにもかかわらず、中国の儒学に憧れる順庵はいつも「庸劣如我，豈足以掛大人之齒」という謙虚な態度で朱舜水に教示を請った。順庵に対して、朱舜水は、「台臺文苑之宗，人倫之冠，博綜夫典謨子史，研窮乎孔孟程朱。逖矣！聞名於西土；晚哉！相見於東都。」と学識豊かな儒者であると認めた。[21]そして、『論語・学而』の「敏於事而慎於言」を引用し、「敏慎」を以て好学の順庵と互いに励み合った。そこで、順庵は「敏慎齋」を号とすることにした。

順庵の舜水に対する見方は、下記の「木下順庵寄朱舜水書」からうかがえる。

---

[19] 『木下順庵 雨森芳洲』、頁 62-63。
[20] 詳しくは『新訂朱舜水集補遺』（台北：台湾大学出版中心、2004）、頁 127-137 参照。
[21] 『石川県史』第三篇（金沢：石川県、1938）、頁 307。

恭惟老先生卓爾風標，醇乎學殖，胸蘊經綸事業，口吐黼黻文章，一生忠肝，擬折漢廷之殿檻，千古道孤，竟極考亭之淵源。適會中原淪胥，備嘗外域艱險，幼安避地，枋得誓天，夷虜君不君，乘桴向東方君子之化，帛肉老其老，賜丈祝南極老人之祥，曰壽曰康，天乃錫箕疇洪福，惟德惟齒，世皆稱軻書達尊。[22]

とあるように、学殖が深く、弁才にたけ、経世済民の理念と忠誠心を持っている耆老であると高く評価している。国が滅ぼされ流離失所の苦難を余儀なくされた朱舜水を幼安（管寧、162-245）や謝枋得（1226-1289）に譬えた。その典故を見てみると、東漢の学者幼安は戦乱を避け、隠居生活を送っている間に何度も仕官を断って講学などの教化活動に尽力した。南宋の文学者・政治家謝枋得は新王朝の元に仕えるのを五回も拒み、「司馬子長有言：人莫不有一死，死或重於泰山，或輕於鴻毛。先民廣其説曰：慷慨赴死易，從容就義難，先生亦可以察某之心矣」[23]と綴った『卻聘書』でその節義を表明し、絶食死した。そして、孔子の「道不行、乗桴浮於海道」(『論語・公冶長』)を借りて朱舜水が清朝に出仕せず海を渡って日本で儒学の教化事業に大きく貢献したことを称賛した。ここでも木下順庵が清の栄禄を拒否し明に忠義を尽くす朱舜水への肯定が見られる。

朱舜水が「答木下貞幹書」の中で、

「正成楠公傳」以忽冗未搆，今已促剛伯（五十川剛伯）累其事實戰功，不必作傳也。一到即當題贊奉上，幸惟以此意達貴國君（前田綱紀）為懇。[24]

と述べているように、前田綱紀が木下順庵を通して朱舜水に楠木正成父子「桜井駅訣別の図」のために賛を書かせたことが分かる。寛文十年（1670）朱舜水が七十一歳で江戸に滞在していた時のことと推定される。同年、徳川光圀も朱舜水に『学宮図説』を書かせた。後に図に拠って三十分の一の大きさの木製模型が作られ、文廟、啓聖宮、明倫堂、尊経閣、学舎、進賢楼、廊廡、射圃、門楼、牆垣な

[22] 「木下順庵寄朱舜水書」、收録於拙書『新訂朱舜水集補遺』、頁 137。
[23] 謝枋得：『疊山集』(台北：台湾商務印書館、1966 年)、頁 11。
[24] 朱舜水：「答木下貞幹書」、『朱舜水集』上冊、頁 201。

どことごとくかなわないものはなかった。そして大工が骨組みや寸法が分からなかった場合は、朱舜水に教えてもらったという。

四、奥村庸禮と朱舜水

前田綱紀が重臣奥村庸禮（1627-1687）を朱舜水に教えを受けさせたのも、漢学普及の策略の一つである。『加賀藩史稿』によると、奥村庸禮、字は師倹、号は蒙窩、通称は壱岐である。十一歳の時から、藩主前田光高や綱紀に仕え、加賀金沢藩の家老・大年寄まで大任を背負うことになった。庸禮は天資英邁で、繁務に携わりながら、熱心に学問に励み、同時に実践にも力を尽くした。若い時は禅学を好んだが、のち宋儒性理の学に転じた。幕府儒官林鵞峰（1619-1680）、木下順庵そして朱舜水に師事した。[25]

朱舜水が「答奥村庸禮書」の中に、

> 子夏有云：「百工居肆以成其事」，而大學之法，藏脩息游，亦必於學宮，乃所以習焉安焉，不見異物而遷焉也。師弟子相接無幾，且未知其師之賢不肖，何所用其觀摩？觀摩之道，用耳，用目，用心於有意無意，所慎所忽，大庭獨居之際，而後得之。茲者，耳之一官既全聾矣，惟憑目力而心領神會，焉其可也？若又眯其目矣，将何以得於師？賢弟幸為熟計，而達之貴國君，圖所以成就之者。[26]

と、子夏の「百工、肆に居て以て其の事を成す。君子、学びて以て其の道を致す」を引用して、学校で学んだ方が集中できて効果的であると説明した。耳、目そして心を使ってこそしっかり悟り、学の奥義を会得できる。奥村庸禮が藩主にとって有能な補佐役として活躍するよう期待を込めた内容である。

また、中年期を迎えた奥村庸禮が学を為す方法についても、朱舜水はアドバイスをした。

---

[25] 『朱舜水集』下冊、附録五 友人弟子傳記資料、頁 839。
[26] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 272-273。

然中年尚學，經義簡奥難明，讀之必生厭倦，不若讀史之為愈也。『資治通鑑』文義膚淺，讀之易曉，而於事情又近。日讀一卷半卷，他日於事理脗合，世情通透，必喜而好之。愈好愈有味，由此而『國語』，而『左傳』，皆史也，則義理漸通矣。[27]

『資治通鑑』は中国歴代の君臣の事蹟を編年体に編纂した史書で、『國語』は中国春秋時代の八か国の歴史を国別に記したもの、そして『左傳』は春秋時代を中心とした中国最初の編年史である。朱舜水は中年に入った奥村庸禮に、学を為すには奥深い経義の探求に乗り出すよりも、簡潔明瞭な表現をする上記の史書から入門したほうがいいと勧めた。歴史を以て人情を解し、事理をわきまえることができるからである。方法としては、『資治通鑑』の内容を充分理解、吟味した上で別の史書と比較照合して読んでいく。そして「儻得同志之友人十人五人，共相講磨，則事理自然明白，見識自然增長」。[28]つまり、読書会をつくって切磋琢磨しながら見識を高めていけば、より効果的であると勧めた。「一部『通鑑』明透，立身制行，當官處事，自然出人頭地」と、『通鑑』を徹底的に研鑽するメリットは、身を立て道を行い、役職に就いて事務への対処がうまくなり、自然と出世できるところにあると主張し、「殊不知經簡而史明，經深而史實，經遠而史近，此就中年為學者指點路頭，使之實實有益，非謂經不須學也。得之史而求之經，亦下學而上達耳」[29]と、具体的に史書と経書の違いを比較しながらも、経書の価値を否定するのではないことを強調した。また、朱舜水は、

不佞但要賢契知向學之方，推之政治而有準，使後人知為學之道，在於近裏著己，有益天下國家，不在乎純弄虛脾，捕風捉影。若夫竊儒之名，亂儒之實，使日本終不知儒者之道，而為俗子詆排，則罪人矣。[30]

と、程顥の「近裏著己」を借りて、学を為す道は自我を鞭撻して精

[27] 朱舜水：「與奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 256。
[28] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 273。
[29] 同上注、頁 274-275。
[30] 同上注。

微な境地に到達し、国や社会に利益をもたらすところにあると提起し、それを奥村庸禮を通して世間に知ってもらいたいと述べた。さらに、「禄綦重而能下，位既高而不驕。足徵性學之淵源，具見禮詩之訓習，緬懷安石之風采，尚醉公瑾之醇醪」[31]と、王安石のような文才のある政治家や周瑜（公瑾）のような寛大で人の心を掴むことが得意な名将になるよう、奥村庸禮に対する期待を具体的に人物像に挙げて力説した。

朱舜水が「答奥村庸禮書」にも、詳細にその理想像を描いている。

> 賢弟惟以君臣孚契，同寅協恭，乃為百祿之道。身自植德，課子讀書。所謂詒燕之謀，莫過於此。所謂吉祥善事，莫過於此。同朝之誼，在吾前而有德者，吾奉之如父兄；在吾後而有德有才者，吾則援之而同升。吾心固無歉於人矣。又能深念民隱，徧為君德，不佞之所望於賢弟如斯而已。[32]

とあるように、自らは徳を修めるほか、君主をはじめ同僚・子孫・人民への身の処し方を細かく述べた。如何にして*徳を*修めるかというと、

> 至於植德之基，要在多識前言往行；不然，則執非是者以為是，舉非義者以為義，差之毫釐，謬以千里。[33]

と、『易経』の「前言往行を識して以ってその徳を蓄う」を引用して歴史上の出来事やその時代に生きた人物の言行から学んで自分自身の徳を養うと説明し、古を以て鏡と為すことによって、是非善悪を見分ける力を身に付けることの大切さをも強調した。

五、奥村徳輝と朱舜水

奥村徳輝、字は浚明、奥村庸禮の息子である。十四歳の時、前田綱紀の侍臣になった。徳輝は、風骨が選り抜き、才力が優れ、忠誠の情が言動に溢れている。父庸禮及び家臣前田孝貞は並んで一時の俊傑と称されたが、職務を執り仕切る時にややもすれば剛愎に流れ

[31] 同上注、頁 276。
[32] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 269。
[33] 同上注。

る所がある。これに対して、徳輝は徳量寛大で時務に対処する見識を持っているし、何事も公平無私な態度で臨むので上下を問わず皆その人徳を慕った。江戸に赴いて朱舜水に教を受けた。吟詠を好み、五十川剛伯に詩法を問うた。[34]

「徳輝」の名もまた朱舜水によって選定されたもので、その典故由縁は下記の通りである。

> 萬物本乎天，人本乎祖，今原於尊翁之名，以生足下之名，以著禮之効也。『禮』曰：「禮也者，動於外者也」。又曰：「禮極順，内和而外順，則民瞻其顔色而弗與爭也，望其容貌而民不生易慢焉。故德輝動於内，而民莫不承聽；理發諸外，而民莫不承順。」足下顧名而思義，則自處必審矣，是以名曰德輝。[35]

朱舜水はその父親「庸禮」の名を踏まえて、『禮記·樂記』の内容を借り、「内和外順」で礼治社会を成就する役割を果たしてもらいたく、徳輝と名付けたのである。

「與奥村徳輝書」において、朱舜水は「今足下年十八，政前聖志學之期，果能真積力久，豈慮有不斷之木，不穿之石哉？思之思之」と十八歳になった徳輝に、真剣に勉学しようと思えば、度重なる努力で成し遂げないことはないと励ました。また、「但望足下，入奉父母，出而讀書好古，自然日漸通透，至於時俗應酬，均為末物也」[36]と、親孝行の外に勉学に専念してほしく、礼儀作法や交際は枝葉末節のことであると強調した。学習に必要な基本姿勢と態度については、

> 能學，則稠人羣聚之時，必有我師。事務紛錯之際，皆有其學。人人所能而我不能，則不劣而不得不學。人所不能而我獨能，能則不廣而益奮於為學，則無地非學也。彼自暴自棄之徒，日與其師相接，且不知其師之白黑青黄，豈能有益於學哉？[37]

と、「三人行へば必ず我が師あり」、そして、どんな状況でも習得するものがあると、奥村徳輝を鞭撻した。さらに、

---

[34] 『朱舜水集』下冊、附録五 友人弟子傳記資料、頁 839-840。
[35] 朱舜水：「奥村浚明名徳輝説」、『朱舜水集』下冊、頁 447。
[36] 朱舜水：「與奥村徳輝書」、『朱舜水集』上冊、頁 277-278。
[37] 朱舜水：「答奥村徳輝書」、『朱舜水集』上冊、頁 283。

「慨焉激勵，以竭其力」，意思甚好。孔子嘗言，不憤者不啓，不悱者不發矣，慨焉激勵者，其憤悱者也。慨然者，志也；激勵而竭力者，氣也。志氣感奮，其學有不成者乎！竭力二字，受用無窮。竭力以事君必忠，竭力以事親必孝，竭力以讀書修己，則必為賢為聖。人之所以不肖者，皆不能竭其力者也；或竭其力於無用之地耳。[38]

孔子の「不憤不啓，不悱不發，舉一隅不以三隅反，則不復也」(『論語・述而』) を引用して向学心のない人には教えないと学ぶ意欲の重要性を強調し、全力で取り組めば忠君孝親の聖賢になれると説いた。

徳輝が学業を怠けないよう、戒めとして朱舜水は「廢学五端」を挙げた。

廢學之端有五，而性昏不與焉。一曰躭嗜麴蘗，恒舞酣歌。二曰嬈童豔妾，馳騁漁獵。三曰志存乾沒，貪得無厭。四曰營營官途，苟求尊顯，攀附奧援，趨騖容悅。五曰朋比匪人，巧中所欲，誘入荒迷，流連喪志。五者皆害學者也，而性昏不與焉。[39]

朱舜水は繰り返して徳輝に撓まず勉強し、信念志操を高く長く保つよう念を押した。

果能日日讀書，果能終歲咕嗶，果能尋行數墨，孜孜弗怠；則性自開明，若燭炤而數計，自能得乎心，應乎手。自分朽材，可為百尺之豫章，以資國家棟梁之任。若徒自誘而已，或者處心無恒，屢變其業，或者無所得而厭棄之，雖有高材明智，無有不昏不朽者。足下少年英鋭，身處盡美盡善之地，無所攖其思慮，但當一意讀書，果能誓心立志，曰吾必欲如前人，必欲希往哲，必不自甘於流俗凡庸。[40]

六、五十川（源）剛伯と朱舜水

五十川剛伯（？-1699）本姓は源、字は際之、号は霍皐であり、延寶三年（1675）に祿三百石で加賀藩の儒員となった。最初は木下順

[38] 朱舜水：「答奥村徳輝書」、『朱舜水集』上冊、頁 280。
[39] 朱舜水：「與奥村徳輝書」、『朱舜水集』上冊、頁 277。
[40] 同上注。

庵に師事したが、後引見され、朱舜水の弟子になった。著作は『霍皐集』、『助語集要』、『詩範』、『学問聚辨』などのほか、朱舜水が亡くなった翌年（1684）に、その遺著や書簡を集めて『明朱徵君集』十巻を編纂した。しかし、この文集は倉卒の間に整理されたものなので、朱舜水が日本での活動の全貌を明かすことはできなかった。後に前田綱紀が修正・増訂を施したが、残念ながら、この「加賀本」と通称する朱舜水の文集が公刊されるに及ばないまま、前田綱紀は世を去ってしまった。

『朱舜水集』には「與五十川剛伯書」八通、「答五十川剛伯書」三通、「答五十川剛伯問」十一項目と「諭五十川剛伯規」などが収録されている。次はこれらの文献を考察しながら、五十川剛伯が朱舜水に教わった学問の内容を検証してみたい。

木下順庵に師事していた五十川剛伯が、前田綱紀の推薦で朱舜水の門下生になった経緯が木下順庵の「與朱舜水書」から窺うことができる。

> 夫以先生學純德粹，傳中華之道脉，激東海之儒流，聞風興起者，比比皆是，故寡君遣小生剛伯，執意於左右。之子姓源，氏五十川，剛伯其名。其父，幹（順庵）之黨友也。伏冀夏楚之嚴，陶鎔之化，提撕誘掖至於有成，則蓋載之鴻造，幹亦可與感恩。[41]

また、『國史館日録』寛文八年（1668）八月の記事「五十川剛伯來邸、剛伯朱舜水に中華音を学ぶ」という項目にも下記のように記載されている。

> 薄暮五十川剛伯來，自稱曰：梅安（庵）子也。余素聞梅安有子，然未知其面。曾與春泰相知，故相見相悅。剛伯談曰：依加賀羽林（前田綱紀）之召，去月上旬出洛赴加賀，而以木下順安（案：庵之誤）先容謁羽林，受其祿且承命而來江府，為見朱之瑜學中華語音，又問文筆之事也。是羽林在府時與水戸相公（徳川光圀）所約，而奥村因幡與朱之瑜執交故也。順安寄書亦云爾，彼父梅

[41] 木下貞幹：「與朱舜水書」、『朱舜水集』下冊、附録三 有關信札、頁 774。

安求仕於加州而不遂，然其子反（及）此者幸也。[42]

とあるように、五十川剛伯が江戸に出向いて朱舜水に学んだのは、前田綱紀と徳川光圀の約束がきっかけで、加えて奥村庸禮や木下順庵の推薦によって実現されたものである。寛文八年、朱舜水が六十九歳で江戸にある水戸藩の官邸「駒籠別荘」に在住していたが、剛伯に会ってその思いを奥村庸禮に伝えた。

源剛伯來，不佞未免以世俗之情待之，不欲令其輕於執贄。蓋師弟子之間最宜詳慎，萬一不妥，事不能終，則騰旁人之笑口，而阻塞貴國向學之機關，為害甚大也。今觀其器宇循良，更能加之以警策，自有成就。初見之日，所言四病四美，賢弟必已聞之矣。儻深諒不佞之四病，而恢弘學士之四美，斯可不負加賀公之重託也。[43]

と剛伯に「四病四美」や専念の大切さを言い聞かせたものの、正式に弟子として受け入れるかどうかは慎重に検討すると表明した。暫らく師弟の礼を執らない理由は、剛伯への規範の中で明確に説明した。

師弟子事重，不可草草。五倫之中，惟父子兄弟為天親，而君臣夫婦朋友皆人合。故國君進賢，如不得已，而婚姻之始，各擇德焉。朋友則志同道合，然後定交，然朋友尚可徐徐而契合；至於師弟子，今日一拜之後，而後無遷變。故須審察明白，然後擇吉行禮，萬萬不可苟且造次。[44]

と、師弟関係は五倫の関係と違っていながら、「一日師と為れば、終生父と為す」と言われるほど緊密で大切な係わりなので、時間をかけて観察したいと述べた。

前述の「四病四美（徳）」もこの「論五十川剛伯規」に書かれている。四病とは、朱舜水自身の欠点のことを指し、

不佞有四病：一則學疎。不佞三十讀禮，來日本二十四年，目不見書史，在他人十三年之前，不知學問，加以二十七年荒廢，則四十年矣。四十年之後血氣始衰，在下壽為一世矣，豈非學疏？

[42] 山本武夫校訂：『國史館日録』第三（東京：續群書類從完成会、1999）、頁 163。
[43] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 271。
[44] 朱舜水：「論五十川剛伯規」、『朱舜水集』下冊、頁 579。

二則德薄。昨日下人干犯邦憲，是德薄不能化下也。三則太真。事事不肯糢糊聊且。四則太嚴。待弟子不肯放寬循情面。[45]

と、「道を傳へ、業を授け、惑を解く」師として自分は「学疎し、徳薄く、真剣すぎ、厳しすぎ」と謙遜して言うようだが、弟子に対する指導や期待は決して甘くないことを認識してもらいたいのが本当のねらいであろう。文面通り、正保二年（1645）朱舜水が四十六歳で初めて長崎に渡航して以来二十四年目のことであった。「四病」に対して「四徳（美）」は弟子への品格要求である。

弟子須有四德，而聰明不與焉。一則實。不實則不誠，如作室而無基，雖有梗楠豫章，凌雲巧構，無地可施。二則虛。不虛則先自滿，假教之亦不能受。「甘受和，白受采。」不甘不白，鹽梅黼黻，著於何所？三則勤。讀書全要精勤，懶惰遊戲作輟，必無有成之理。四則恒。士人第一要有恒。「人而無恒，不可以作巫醫」，況乎學問修身，為第一等事？若希冀近功，必非真心實學之人。先要檢點此四者有無，然後可以言學。若無此四者，雖一目十行，過目成誦，亦自無用。故曰聰明不與焉。[46]

「聡明」よりも「誠実、謙虚、精勤、恒常心」の四徳目は、勉学や修身に欠かせない情操であると指摘した。

その後、朱舜水が奥村庸禮への手紙の中で、時々剛伯の近況を言及した。例えば、「源剛伯氣度甚佳，語之稍能領略，從事三月，亦未見躍冶破綻，不佞望其大有成就」[47]と、剛伯を三ヶ月間観察して、その気質度量は甚だ良く、言葉も徐々に理解できるようになり、悪いところは特にないと期待を込めて評価した。また、「五十川剛伯近業稍進，賢契惟當勉令專攻，若使虛費韶華，深為可惜」[48]と言って、奥村庸禮からも励ましてやるように頼んだ。

五十川剛伯が二十歳のときに、朱舜水は「濟之」という字を選定し、「五十川剛伯字濟之説」にその由縁を説明してやった。

---

[45] 同上注、頁 579-580。
[46] 同上注、579。
[47] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 272。
[48] 朱舜水：「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』上冊、頁 270。

禮，二十而冠。冠而後字之，尊其名也。子今年二十，合於當字之禮，且初學於我，而屢以為請。子姓源，氏五十川。發而為源，流而為川，皆至柔也。『傳』曰：「水至弱，民狎而玩之」。名為剛伯。伯者，長也，是剛之最者也。二者固宜有以調劑之矣。『書』曰：「沈潛剛克，高明柔克。」『易』曰：「水火相為用，既濟」。剛柔正而位當也。故字之曰「濟之」。濟者水火之德也，而「濟之」者則人士之力也。書不云乎：「天工人其代之」。茲以令月吉日，字爾以德，爾尚棄爾幼志，以順聖賢之則。[49]

『左傳』『尚書』『易経』などを参考にして「剛伯」という強すぎる名前のために、調和を求めて「濟之」と名付けてやったのである。

結論

朱舜水が加賀藩主前田綱紀やその藩臣たち、そして弟子らとの対話の内容は、すでに彼が加賀藩で儒教思想を普及する概貌を描き出している。彼は日常の実践によって論理を宣揚し、加賀藩における儒家の政治思想を地道なところから広げる試みをした。例えば、改名や字号選定のプロセスを通して、民主・民本・民利など「経世済民」の実学思想を強調し、藩政改革の推進に役立ってもらおうとした。

覃啓勛がその著書『朱舜水東瀛授業研究』に、朱舜水が日本滞在期間中、「彰孔興教」において果たした実績は四つあると言及した。一、賛を書くことによって孔子を礼賛した。一、書簡を使って儒学を伝承した。一、文章を書いて儒家思想を論弁した。一、孔子廟の図面・仕様を作製することによって教育振興に役立った。これらの実績は加賀藩でも見ることができた。

朱舜水が弟子たちに『資治通鑑』や『史記』を読むことを頻りに勧めたのは、君臣名分の歴史観を理解してもらいたかったのである。そして、朱舜水が執筆した数多い論賛の中でも、忠君愛国や大義名

[49] 朱舜水：「五十川剛伯字濟之説」、『朱舜水集』下冊、頁 449。

分について評析をした。やがて積み重ねた成果が『大日本史』の編纂や加賀藩の藩政改革へと繋がっていった。明末清初の亂世に生きる朱舜水は、日本を避難の地に選んで、「亡命の儒者」となってしまった。しかし、「本非倡明儒教而來」というこの選択は、思いがけなく徳川初期の社会に儒教普及の功をもたらした。